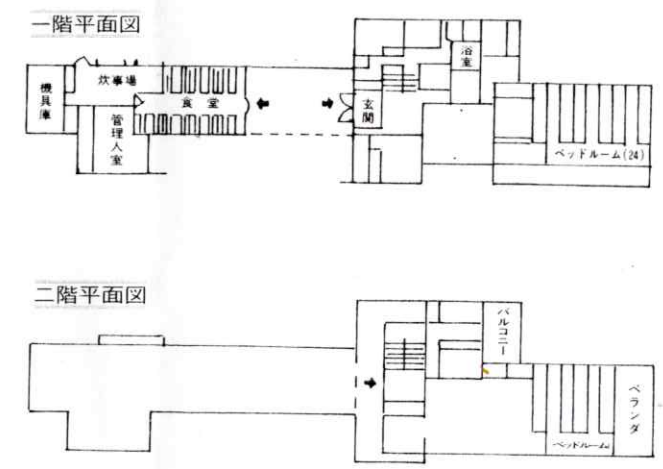


創立80周年
記念誌より

野間園ロッジ平面図



ロッジ
設計 日進建設一級建築士 谷本惣一
施工者 増岡組
総工費 一、九〇〇、〇〇〇円
延面積 五三四・五三二五平方メートル
構造 鉄筋コンクリート及補強コンクリート・ブロック造
内部 ベッドのある部屋二(男子用二四・女子用一六ベッド)
協議室を利用すれば更に五〇名程度宿泊できる。
その他談話室・協議室・食堂・炊事室がある。
グラウンド 二面 (一、野球、サッカー、ハンド・ボール用
二、排球コート二面)
グラウンド(約四〇〇〇坪)は県の失対事業で造成された。
なお、ロッジ建設について増岡組は終始誠実に工事に当たられた上、五〇万円及び、工事費一〇万円相当の陸橋を寄付された。

かくて野間園は大きく変貌した。昔なつかしい宿舍もなくなり、所々に残っていた松林、笹藪、灌木林は姿を消して広いグラウンドとホテルを思わせるようなロッジが出現したのである。そしてこれらは所期の目的通り、本校運動場の狭隘さを大いに補い、団体宿泊訓練による心身の鍛練に大いに役立って、その教育的効果は絶大なものがある。

一九六三年(昭和三八)六月九日には野間園完成式に続き、新グラウンドで第一五回大運動会が行われ、その後第一六回、第一七回の運動会もここで行われている。

新装野間園は昔とは違って変わり、行事も新時代にふさわしい形式で行われてはいるが、野間八郎氏の精神はここに脈々として生きているものといえよう。

野間園の活用

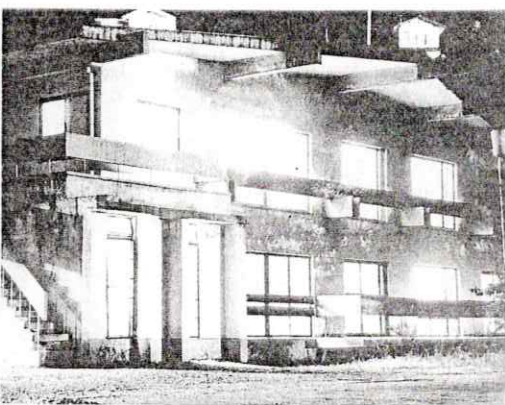
一九六七年(昭和四二)以降、野間園の沿革は、そのまま焼山地区住宅地発展の歴史でもある。

一九六三年(昭和三八)六月に完成式を挙げた野間園ロッジは、毎年夏季休暇を中心に、クラス、クラブ、クラスマッチ等に利用されてきた。

野間園建設の目的は「本校運動場の狭隘さを大いに補い、団体宿泊訓練による心身の鍛練に大いに役立たせる」ことであった。野間園が建設さ



二河川での飯盒洗い



合宿中のロッジ夜景

れた頃は、周辺が森林に囲まれ、ロッジの裏を流れる清流も美しく、林間学校の観があった。

焼山地区の住宅建設が進むにつれて、清流には上流からの汚水が混入し、川の水が炊事に全く利用されなくなった。周辺の住宅からは、夜おそくまで、キャンプファイヤーをしたり、大勢で騒ぐことについての厳しい苦情が持ちこまれるようになった。これにはロッジを利用する生徒にも問題がある。厳粛なるキャンプファイヤーを単なるレクリエーションと考え、火のまわりで騒ぐことのみを終始し、夜遅くまで大声で話し合い、時には花火で驚かすこともある。

一九六五年（昭和四〇）ころから、進学体制が強化される中で、生徒の意識は受験の重圧から一時的に逃れるためにも、合宿訓練を

レクリエーション化していった。一九六八（昭和四三）年度まで、全クラスに夏季休暇中に一度は合宿訓練を義務づけ、クラスのリーダーに合宿指導をしていたが、それも中止してしまった。リーダーの指導をしないままの合宿は、訓練の場にはならないで、レクリエーションの場となってしまうのは必至であった。一九六九年度からは、希望のクラスがあれば利用させるが、従来のように義務的に全クラスに合宿訓練をさせることは中止された。その代り生徒会執行部の役員研修に使用され始めている。これは低調な生徒会役員立候補の現状、生徒会執

行部のあり方、学校行事についての反省と今後のとりくみ等、生徒部の教師と生徒会役員とが合宿して話し合う機会としたのである。

一九七二（昭和四七）年度から、野間園ロッジ利用方法は更に変更された。一九七二年三月末の職員会議において「野間園合宿はクラブのみ許可し、クラスの使用は禁止する」ことが決定された。理由は、先述したようにクラスの合宿がレクリエーション化され、集団訓練としての場でなくなってきたからである。クラブの合宿には



野間園の憩いのひととき

合宿としての目的意識があるが、クラスの場合はどうしても無目的となつて、唯、徹夜して騒ぐことになってしまう。生徒が自覚し、合宿の意義を明確にして、目標に沿った訓練が行われるようであればならない。

その間定時制では全日制と同じく、ロッジ完成後、各クラスの合宿訓練が行われ始めた。しかし、一九六九年（昭和四四）ころから、クラスの合宿訓練に代って、毎年四月に「新人生オリエンテーション」が行われるようになった。生徒会主催で教師も生徒と一緒に、土曜日に一泊し、夕方から翌日曜にかけての日程に沿って次のような内容にとりくむ。まず、生徒会執行部役員の自己紹介、新入生全員の自己紹介に続いて、生徒会主催の年中行事、クラブ紹介、定時

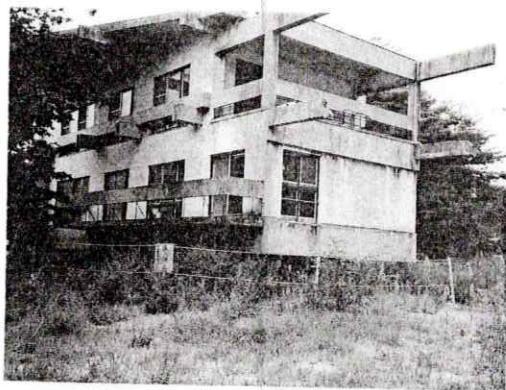
制高校生として四年間の過ごし方を説明し、定時制の全容を理解させ相互の意見交換をする。そして最後は歌やゲーム等のレクリエーションをする。入学して早々の不安な一年生に、このような合宿訓練を行うことは有義である。僅か一泊二日であるが、その合宿訓練を通して、急速に生徒同士、先生と生徒が親密になる。そのことが以後の学校生活にどれだけ役立つかはかり知れないものがある。定時制の合宿訓練は一時的に中断されたことはあるが、現在まで続けられている。

一九七〇年（昭和四五）五月の父母と教師の会理事会で、野間園改修費三〇〇余万円が可決され、増岡組によって、屋根の雨もり、ジュウタンの敷きかえ、内装の改修等、殆んどすべて修理された。現在の川沿いにつくられている百米のフェンスの取付工事は、一九七三年（昭和四八）六月に完成した。

更に一九七九年（昭和五四）七月一〇日にはグラウンドを整地すると共に、夜間照明燈四基が設置された。この照明施設は、広島県立高等学校体育施設開放事業に基づいて県費で設置したものである。翌年三月一三日には更衣室、倉庫、便所、水道設備を備えたクラブハウスが建築された。野間園グラウンドは従来から生徒の使用に支障をきたさない限り、広く一般人に開放していたが、この夜間照明設置に伴い午後九時まで使用可能（それ以後は不可）になり、今では年間使用回数は二〇〇回以上にのぼっている。

次いで一九八二年（昭和五七）三月三十一日には、テニスコート二面が完成し、軟式庭球部の専用練習場となった。

これで常時野間園グラウンドに通う生徒数は野球部とあわせて一日平均四〇〇名に達し、盛況を呈するようになった。



解体されることになった野間園ロッジ

だが反面、生徒の毎日の交通費（バス代片道二〇〇円）の捻出に苦勞しなければならなくなった。

そこで学校では一九八三年（昭和五八）より野間園での活動日には往路だけバスを借り切って生徒を送る便宜を計っている。

一九八五年（昭和六〇）五月九日二河川護岸工事完了によって、ロッジ敷地分が廃川敷地となり、県有地に移管された。これで今までロッジの一部が河川敷に突出し、違法建築とされていた問題は解決した。

一九八六年（昭和六一）三月三十一日には県道幅員拡張工事によって、県道側のり面はブロック壁となり、正門入口近くの松の木も伐採され、外燈二基も移設された。さらに正門内道路も傾斜をゆるくし、全面舗装してこの附近の面影は一新された。

しかし、一方では近代的な威容を誇ったロッジにも老朽化の波は押し寄せていたのである。一九八六年（昭和六一）五月の検査によって、ロッジの天井及び柱のコンクリートが甚だしく剥げ落ちて（ひどいところは中の鉄筋が見える）危険な状態にあることが発見された。学校では直ちに使用禁止の措置をとり、本年度以降は野間園ロッジでのクラブ合宿は、残念ながら中止せざるを得なくなった。

その後の父母と教師の会の理事会（一九八六年八月二六日）で野間園ロッジ解体が決議されて、九月初旬に管理室棟を残して解体された。再建については全く白紙の状態である。